

集団への絵本の読み聞かせにおける聞き手同士の相互作用に関する研究

鈴木 麻理奈

絵本の読み聞かせは、幼児の発達に良い影響を与えるとされており、現在様々な場所で絵本の読み聞かせが活発に行われている。

家庭での絵本の読み聞かせは、親子間のコミュニケーションや、母子相互作用に有益であること、また、将来の絵本の子どもの社交性に影響することなど、さまざまな効果が見られている。一方、保育の場などで行われる集団への読み聞かせは、「一人の子どもの感動、発見、おどろき、楽しさが他の子どもに広がっていくこと」と言われているが、それを検証する研究が少ないために、はっきりとした効果が示せないのが現状である。

そこで本研究では、集団への絵本の読み聞かせの意義を検証することを目的とした。具体的には、保育園における読み聞かせ場面を、特に聞き手同士に起こる相互作用に着目して観察を行い、読み聞かせで何が起きているのかを明らかにした。

観察対象は、私立保育園の5歳児クラスとし、普段の生活で日常的に行われる読み聞かせをビデオ撮影した。撮影したものを1秒ごとの写真に分割し、聞き手一人ひとりがどのタイミングでどのような動作をしたのかを記録した。

読み聞かせ場面の分析の結果、「笑い」と「振り向き」には、ほとんどの聞き手同士で影響を受けている様子が見られ、それらには5つのパターン「「向」からの動作」「動作からの「向」」「「笑」からの動作」「お互い向き合うだけ」「3人以上でのコンタクト」があることが明らかになった。

本研究により、集団への絵本の読み聞かせにおいて、聞き手同士に笑いに関する相互作用があることが示された。これらは、感情の共有を行うことにつながっている可能性がある。今後の課題としては、発話の分析を行い、「笑い」「振り向き」の行動とともに、聞き手がどのような発話をしていたのかを確認し、これらの相互作用が感情の広がりに関与しているかどうかを把握することである。

(指導教員 松村 敦)